

【児童臨床:分析的セラピーの治療プロセス】 (1968)

マーサ・ハリス(Martha Harris)

〔※原題;The therapeutic process
in the psychoanalytic treatment of the child〕

ご承知のように、子どもたちは実にさまざまな理由で治療へと導入されます。或るケースでは子どもの病気は家族内の何らかの障り disturbance の表徴であるという場合もありましょう。それで「家族精神医学」といったセッティングでの関わりで両親の態度に影響を与えることで間接的に子どもを援助することも出来ましょう。しかしながらよりよい環境に適度に反応することができず、いかに最適な環境が整えられたにしてもフラストレーションに耐えられず、そして与えられているものを十分に活用し得ずにいる子どももいるわけですし、そうした子どもをわれわれセラピストは抱えることになるのであります。そうした子どもたちといえますのはすべてが、いずれ後年になるやも知れない成人にも似て、外界において機能する能力においても、また思考、情緒そして想像力(イマジネーション)といった内なる世界においても何かしら損なわれており、それで大いに苦しんでいるのであります。それに伴い、多かれ少なかれ葛藤やら自己を巡っての屈託、もしくはパーソナリティーの質の低下も認められることがありましょう。

精神分析的技法によるセラピーは、患者の無意識の葛藤、基本的には愛憎といったことになりませんが、そうしたことの探索が必要とされます。それらはまず最初に母親に向けられ、引いては父親、さらには周辺の誰彼に対して拡がってまいります。そうした対象との関係性は、子ども自身のなかに内在化されたものであるわけですから、切れ間なしに現に活動しており、そのように彼の現在進行形の経験に何らかの影響を及ぼしているといえるのであります。Mrs. クライン及びその学派の衣鉢を継ぐ者の一人として私は、子どもたちの精神分析的治療とは、成人を対象としたものとはその原則において基本的に類似したものであると考えますし、そして子どもにとってコミュニケーションをより容易にするためには技法上の必要な修正をすることもあり得るといったことも考えるわけでありまして。このようにして勿論われわれは言語的表現に重きを置きますし、またそれを奨励するとしましても、他にもかなりの程度において、例えばお絵描き、遊具でのプレイ、もしくは演劇的なプレイといったことにも大いに依存することになります。同様に他にもその子の態度やら身振り、顔の表情、声の調子によって伝えられるところのより微妙な非言語的なメッセージにも大いに頼らねばなりませんでしょう。子どもは遊戯、行動、そして言葉でもって思いのままに自由に振舞えるといったセッティング(場の設定)が与えられるわけでありまして。それは出来る限りセラピスト側からの直接的な働きかけ、それとなしの励まし(慰め)もしくは批判などは抜きにしてということになります。そのようにしてわれわれは、その治療の進展において、子どもが内のおよび外的いずれにおいても懐くところの関係性における情緒的揺らぎやら葛藤などをわれわれに伝えてくれるようにと励ましてゆくわけでありまして。私は、こうした技法ならびにセッティングを、子どもを週一回のセッション、もしくはそれ以上ですと週5回までの回数で治療する際に使っております。

私はこの論文においては、「治療的プロセス」について焦点づけてお話いたします。それは実に転移解釈をとおして得られた洞察の結果として、子どものさまざまな側面とセラピストとの間でのコミュニケーションが育ってゆくことなのであり、また子ども自身の心の内なる部分間のコミュニケーションもまたいっそう促進させられてゆくことなのであります。

そこそこ長期にわたる精神分析的治療の経過におきましては、セラピストはそれぞれ異なった時期に、その子どもの患者の過去そして現在の環境に於ける殊の外重要な人物としてのさまざまな側面を表徴することになります。それも彼がどのように見做すかに応じてであります。しかし基本的にはその子のわれわれとの関係性といえますのは、尚も彼の母親の懐(ふところ)のなかにありながらも、外的現実のごく最初の経験として生じるわけであります。その母親から与えられる食べ物、慰めそして欲求不満といったものを消化しながらであります。つまりそれら経験の性質といえますのは、彼自身の積極的なアプローチと並んでそれがどのように受容されたかによって形づくられたものであり、尚も形づくられ続けていっていると言えるわけであります。理解力のある母親とは、食べ物および愛情でもって幼子にアプローチするばかりではなく、その子どもが排除せんとする不安感といったものにも耐えてやり、さらにはそれを彼のパーソナリティーの幾らかでも耐えられるべき部分としてどうにか甘受できるように援助してやることのできるものであります。幼子のパーソナリティーを経験し、かつうまく扱うことのできる母親の能力とは、その子が不安感にさほど圧倒されずに、自らの内に統合された、かつ理解力溢れる人物を培うといったことに手助けを惜しまないということにありましょう。

こころの深層において、そして治療が進展するにつれてより明瞭なかたちで転移は深まってまいります。精神分析的関係性はこのモデルを繰り返し反復してゆきます。われわれの子どもの患者は幼子なのであります。しかし彼らはまた成長してゆく大人であるとも言えるわけです。その年齢および知力に応じたところで言語的コミュニケーションを理解することができましようし、またそれに熱心でもあります。そこでわれわれは、彼に言葉をとおして彼らがわれわれに投影するところの思考不可能で、かつ名付けようのない不安感を彼らにどうにか伝えることができるのであります。そうしたことを有効的に可能にするためには精神分析的理論の背景にそこそこ充分に通じていることが重要ではありましようが、それだけでは不十分です。われわれが理解することを経験し、そしてそれをその子固有のユニークなコミュニケーションにフィットした解釈というかたちで子どもに伝える前に、それがわれわれ自身の深い情動に触れられていなくてはならないという意味合いからして、十分にわれわれ自らが分析されている必要があるわけです。直感 intuition なしの、理論にのみ基づいたところの解釈は無意味だからです。

【省略】

〔※原註及び訳註；ここでは「ウォルター」という10歳の男児の症例が割愛されております。その詳細については、すでに訳出されておりますマーサ・ハリスの論文【児童臨床：サイコセラピストの家族との関わり】(1968)の中の〔症例ウォルター〕P.6を参照されたい。〕

セラピストへ向けて最早期のそして最も原始的な情動 emotion が転移されるということが、子どもの場合、成人に比べましてとても迅速でかつ熾烈に起こる傾きがあると言えます。われわれは時にはかなり長期にわたる抵抗に耐えねばならぬことになりましょう。侮蔑的な暴言、そして身体的な暴力といったことが伴うこともありますし。それは成人の場合には滅多にあることではありませんわけで。こうした理由で児童セラピストの場合には、タフであること toughness そして内なる耐久力 inner strength area といったものがその感受性と同じぐらいに重要不可欠といわざるを得ません。セラピストがそうした抵抗に、そしてそれに伴う過剰な投影同一化に耐えて屈しない能力というものは、つまりは圧倒されることもなしに、そして分析的技法を放棄することなしに、そうした状況の力動性を理解することにたゆまず励むということなわけですが、それ自身治療的といえるのであります。たとえ理解が完全でないとしてもであります。もっともいつも不完全であることを免れることは出来ませんわけで。しかしながら、そうした情動、つまりは貪欲過ぎるほどの独占的愛情、過剰な憎悪といったことですが、その執拗さそして頻回に起こることが子どもにとっても手に負えないほどである場合、それに無期限に耐え続けることは可能とも言えませんでしょう。もしも幾らかでもわれわれがそれら情動の動きを、そしてそれがわれわれとの間にどのように関係づけられているのかといった関係性のパターンを理解する眼力を備えていないとしたら…。われわれのセラピストとしての精神力とは、われわれ自身の内でそうした情動に充分馴染みがあり、かつそれらにどうにか対処できるに至ったことから培われるわけでありまして、そしてまたわれわれの患者との間で遭遇される洞察へ向けての頑なな抵抗を徹底操作(ワーク・スルー)するといった、そのような経験のすべてからも育まれてゆくものといえましょう。そうした経験から、手に負えない執拗な困難を解きほぐしてゆくことの努力をひたすら遂行してゆけば、やがて新しい異なったパターンへと事態が変容してゆくといった自信が養われてゆくのであります。

症例ポール; 10歳の男児

ここで私は10歳の男児ポールのことについて語ろうと思います。私は彼との治療において3年ほど一緒でありました。彼は人懐っこく、友好的であり、思いやりのある男の子でした。両親にはとても愛されておりましたが、学校ではどうにも成績が芳しくありません。どうにも気が抜けて、やる気が出ないといったところなのでした。彼は、私との分析をととてもポジティブな姿勢で開始しました。すぐさま彼の特別な関係性のなかでもとりわけて最大の特別なものとする構えを示し、そして彼自身どんな努力をするわけでもなかったのですが、今にクラスのトップになるといったことが想定されていったわけなのです。私の解釈にはいつも礼儀正しく耳を傾けておりました。そしてこの理想的な関係性は、最初のホリディ(休暇)を迎えたときに破綻したのでありまして、それ以降かなり長期化した、ますます暴力的な抵抗が続いてゆきました。それは未曾有といってもいいほどで、彼はこの時期私に対して、殊に私の解釈に対して、攻撃を仕掛けてきたのであります。それは言語的にであり、また身体的にもでありました。<なんだって！考えたってわけなの？おまえになんか、考える権利なんてないよ。床に這いつくばって掃除でもしていればいいのさ。女というのはそういうもんだろが…。男たちの後にくっついて控えておればいいのさ。>

おまえはまだまだ若い。だからまだたくさん赤ちゃんを産めるのは間違いなからう。だけど、それらのどれをもことごとくぼくが皆ぶつつぶしてやる。それでおまえの口を再び開けることなど出来なくてやるさ・・> といったふうにてあります。私の語る解釈は彼の羨望的な攻撃を挑発することになり、それでそれを聞くまいとして、彼はしばしば家具で入念にハウスをこしらえ、そこに自らを閉じ込め、耳を塞ぎ、本を読んだり、携帯ラジオに耳を傾けたり、もしくは菓子類をムシャクシャ食べ、その菓子の包み紙を私の方へとポイと投げて寄越すのであります。たびたび私としては絶望を感じることもあり、こうした暴力に取り組むことに虚しさを覚え、彼の侮蔑には激怒させられ、そして私の解釈が一見して何の益にもならないことに気持ちを挫かれるのでした。それは勿論のこと、彼が躍起になって私にそうした心の状態を投影していたからであり、それを私は彼に伝えようと努めていたというわけなのでした・・。

私へ向けられた彼の羨望的かつ破壊的な攻撃、そこでの私は、すなわち主として授乳することもできかつ創造的でもある母親というわけなのですが、そうしたテーマについて繰り返し吟味を重ねてゆくことは彼にとっては猛烈に腹立たしいことなのでした。なぜなら私は専ら彼一人の所有とはいえないからです。こうした攻撃によって引き起こされた迫害感および圧倒されるほどの罪悪感から、徐々に抵抗は減じてまいりました。治療の最後の年になりますと、彼はごく自然に自発的に寝椅子に横になり、そこで成人のように自由連想をし始めました。彼はその後も繰り返し、後悔の念を示しながらも、こうした暴力的な時期に舞い戻ることもありましたが。そして彼は時折彼の両手が耳を覆っていたとしても、実際のところ彼は聞いているのであり、そして私が言ったことを後から思い出し、夜にその記録を書き留めることをするんだということを語っております。そして私がなにごとか、それを彼が真実だと感じることを語っているとき、怒りが込み上げることで自らを呪うことがあるということでした。それって実に不可解至極なのです。なぜなら彼はまた、それを聞きたいとも望んでいるのですから・・。この頃になりますと、彼は私に対して感謝の念を覚えるようになってまいります。というのは、学校の成績が著しく向上したということに限らず、彼は自信が付いてきて、それに生きることを愉しめるようになってきていたからです。彼はより逞しいパーソナリティーになってきたといえましょう。欲求不満にも、うわつらの魅力でもってそれらを回避する代わりに、どうにか対処できるようになってきていたわけなのです。彼はその最後の頃のセッションで、こんなことを私に言いました。<ぼくがどんなに‘いやなやつ’かって自分のこと解ることで、どうして気分が落ち着いたりするんだらうね。ぼく、フルシチョフ※のこと、今なら相手にしてひと勝負できそう。でもたぶんあなたの許に分析するために彼を送った方がいいみたいだね。そしたら彼も少しは考えられるようになるだろうから・・>と。〔※訳註；ニキータ・フルシチョフ(1894-1971)元ソビエト連邦第一書記。〕

ポールはその性格からして、つまり彼の生来の気立ての良さを上手に取って、他からの承認やら好意を受け、それで迫害者となりうる誰彼を懐柔せんとするといった具合に、そのようにして苦悩することの切迫感を回避せんとしていた、そんな男の子だといっていいでしょう。彼のような子どもにとって精神分析的治療に対して協調性を持つことの動機づけとは何だったのかということをごここで考えてみたいのであります。協調的ということでは、明らかに彼はそうだったといえます。それを後に回顧的に振り返

って彼自身それを潔く認めただけですし、またそれとはまったく相反するような暴力的な一時期ですらそうであったといえましょう。それから例えばウォルターのような子どもですが、たとえその至極切迫した不安感が鎮まったあとでも治療を継続する動機づけとは何だったといえるでしょうか？彼の場合は最初の6ヶ月間でそれが緩和されたわけであります。ここで、もしわれわれがフロイトの提唱した「2つの精神的機能のプリンシプル」について考えを巡らせ、そして幼い子どもにすら、快を経験しかつ苦痛を避けることの願望と同じく、世界をそれがあるがままに理解することのニーズというものがあり、それには自らの内なる世界の現実というも含まれるといったふうに理解するならば、この謎をほぼ説明したことになるのではないかと私は思います。‘真実の窮乏 starvation of truth’ということをもビオンが彼の最近の論文「A theory of thinking」(1962)の中で語っておりますが、それは身体面での滋養物の窮乏に類似し、精神的な意味合いでの脆弱をもたらすものといっていいでしょう。たとえ受け入れ難い解釈であってもそこに‘真実 the truth’を悟ることは、安堵感やら活力をもたらすことができ、それで不快感を和らげるともいえるのであります。或13歳の女子でしたが、最初の頃ひどく敵対的にかつ腹を立てることの多かったのですが、彼女はこんなことを語っております。<わたし、あなたのことMrs. C(前任のセラピスト)と比べてるの。それは学校の私の英語教科担任の二人の先生との比較にもなるんだけど。最初の頃、Mr. Aが担任だったわけ。彼は誰にでもとても親切で、とても褒めてくれて励ましてくれる人だったの。書いたエッセイを読んでくれて、良いところをいつも褒めてくれるの。だから、彼のためにもエッセイを書くのがとても嬉しかったの。だけど、自分がほんとうにこれでいいのかっていつも迷う気持ちがあったわ。それからMr. Bに代わったんだけど。その新しい先生は 私達に対してそんなに愛想よくないわけ。自分の仕事に熱心というのかしら、私達にはどこに間違いがあるのかを告げ、それを直すようにことをさせるわけ。それに付き合うのは結構大変なわけよ。だから厭だなんて思いはあったけど、でもとにかくそれで学ぶことが大いにあったと思うのね>ということでした。

このようにして見てみますと、分析的治療において、どうやらセラピストは補助自我 supplementary ego として機能しているといってもいいようであります。子どもはそれに依存しているといってもいいでしょう。そこからメッセージを受け入れ、その深みにおいてわれわれに向けた転移関係性の中の主要な筋道を追い、そしてそれらが解釈されるのを通して、彼のパーソナリティーの分裂・排除され、かつ抑圧されているところの側面との接触へと引き戻されるのであります。転移における相互作用をよくよく吟味することで、われわれは解釈がもたらす現実 reality への子どもの反応において起こる歪みそして妨害を知覚し、それらに彼の注意を促すのであります。解釈を彼が提示したマテリアルに基づいて、実証的に明示することで、われわれは彼が能動的な役割を果たすことのできる、関係性のプロセス a process of understanding relationships として分析作業を理解できるよう子どもを援助できるのであります。そうしますと、分析的状況において避けようのない欲求不満によって惹起された情動のさらなる理解が彼をしてその日常的な環境においてより現実的に欲求不満に対処できるように援助されることになるといったわけです。学ぶことそして自ら順応すること、もしくは必要ならば己自身を変革してゆくことであってもいいでしょう。そのように励んでゆくことなのです。それから背を向けたり、もしくは万能感的な歪みでもってそれを欺くのではなくて・・。

症例デイビッド; 2歳時&その後の潜在期において

これから私は、或る潜在期の男子の分析から2つのセッションのマテリアルを抜粋してご紹介させていただきます。彼は当時9歳であり、その分析の最初の数ヶ月にまず最初の絵が描かれました。それから彼が10歳のとき、つまりその翌年に2番目の絵が描かれました。〔※原註; これらの原画は紛失されてしまっております。〕 この2番目の絵は2段階に亘って描かれたものです。まず最初は私が解釈をする前でありました。それからその解釈の後に彼はどうかこの絵を仕上げたわけであります。これらの絵及びそれら2つのセッションにおける彼の振る舞いを比較検討することで示唆されるものから、この1年間の彼の変化の兆しをここに論じることができるかと思われまます。

しかしまずはここで、私が初めにデイビッドと知り合うことになった経緯について簡単にお話ししましょう。彼は、2歳になったばかりの頃母親に連れられてタヴィストック・クリニックを訪れたのですが、それは彼が切迫した睡眠障害を起こしていたからです。睡眠薬が飲まされ、どんどんその量を増やしても全然効き目はありませんでした。母親はその当時妊娠7ヶ月目でありました。彼らはどちらもが顔面蒼白で、緊張してほとほとたびれ果てているといった感じで、瞼の下には大きなクマが出来ており、いかにも困窮の極みといった印象でした。妊娠は正常であり、分娩はごく短めでしたし、1時間半程度で済みました。誕生時に彼の体重が6ポンドしかなく、ショックであり、それで酸素吸入が為されました。母親のオッパイの乳の出は良く、授乳はデイビッドが求めるときに与えられておりました。彼の吸い付きはよく、身体的にも健やかに成長していったわけですが、頻繁によく泣くことがあり、注意を向けてもらい、かまってもらえないと滅多なことでは落ち着くことは出来ないのでした。3ヶ月目になって、彼は授乳も睡眠もより規則的になってまいります。それから彼が4ヶ月目になったとき、母親がひどい風邪を引きます。そして誰もが皆抑うつ的になったと思われるのですが、授乳することを諦めざるを得ないことになります。デイビッドは哺乳瓶でミルクもしくはジュースを与えられても拒み、それでそのままカップとスプーンで離乳食を食べるということになっていったわけです。彼は指吸いもしませんでした。この時期から寝つきが悪くなり、日中も夜も睡眠がよく取れなくなります。睡眠障害は彼が22ヶ月目になった頃に殊に切迫してきます。母親は妊娠2ヶ月でありました。彼にどう対処したらいいのか困難を極めて、彼女は近くの小規模のナースリー・スクールに一日1,2時間ほど彼を預けるやら、同じフラットの隣人にも預かってもらうといったことをしたわけです。最初の頃彼は大いに泣きはしましたものの、その後いづらか落ち着き、どうか愉しめるようになっていきます。同時に、母親から特にプレッシャーが与えられることがなかったにも関わらず、彼は突然オムツが要らなくなります。この発達ステップは、ますます不安感を伴う事態をもたらします。というのは、頻繁に夜目覚め、そして母親がやってきてひっきりなしに彼を宥めることをしない限り、彼はヒステリー状態になっていったからです。彼女は彼の部屋で寝るようになり、それで一度に30分以上の睡眠を得ることはもはや滅多になくなったということになります。

これが、彼らがクリニックを訪れたときの状況です。そして私はすぐさまデイビッドを緊急治療へと導

入したのであります。私は彼を5ヶ月以上、全部で40から50セッション診たこととなります。この時期に母親は二人目の子どもを出産し、そして2週間の間入院していたわけでありました。

デイビッドの睡眠トラブルは最初の2,3セッションで好転し、そしてその後数週間でほぼ完璧に消失しました。それは主に、母親のからだへの糞尿による攻撃に対しての彼の不安感を解釈した結果でありました。攻撃は概して父親のペニスに投影されていたといえます。彼の主要なる不安感は、母親の喪失そして彼自身の破壊性を巡ってであり、そこには彼の父親による去勢を含んでもおりました。この頃にはとてもあたたかな愛着と思いやりが母親に対して生じてきます。しかしまた、羨望を排除せんとする企てにおいて彼女に‘しがみつき同一化 a clinging identification’があったといえます。治療の間、睡眠が好転しただけではなく、彼はまた不安やしがみつきが少なくなり、そしてあれこれ愉しむことがもっと出来るようになっていったわけです。こうした彼に見られる進展は、母親の不在中も、そして新しい赤ちゃんと一緒に母親が戻ってきてからも維持されております。父親は最初の頃、治療に反対というわけではないにしてもやや無関心であったわけですが、この時期私に会いに来て、治療にとっても協力的になってまいりました。デイビッドを定期的にセッションに連れてくるようになったのです。母親と新しい赤ちゃんとの関係はうまくいっており、デイビッドは父親からおまけの注目を得てサポートされてましたし、それで新しい環境にも適応でき、むしろ嫉妬で圧倒されるということもなく赤ちゃんを愉しむこともできたのです。治療は已むを得ない事情で中止されたわけですが、両親はもしも将来デイビッドに問題が生じたならば私に再び連絡をするということで了解がなされておりました。

この7年後に、私は彼らから再び連絡を受けました。電話での話からしますと、デイビッドはずうっと学校でいい成績であったのが、なぜか成績がガタ落ちになってきて、そして不安げになり、夜眠れなくなってきたということが起きていたとのことでした。彼は今や3人兄弟の一番年上になっておりました。魅力的で快活な母親は依然として抑うつ的なことが続いており、それはデイビッドの誕生以降そうした気配がなくなかなかたわけですが、目下のところ両親間に夫婦としての問題が起きていたのです。学校での成績が落ちたことは新しい数学の担任教師と関連しているようであります。無愛想で、でかい声で喋るこの男性教師に質問されると、デイビッドは頭が真っ白になってしまうようでありました。こうした頭が空っぽになること、そして混乱してしまうのはまた、父親が、すなわち知性的で、野心的な作家でもあったわけですが、一緒にゲームをしているときなど、息子たちに何かと質問を浴びせかけたりすることがあり、そうしたときなどもデイビッドはついそんなふうになりがちであったようです。

この当時デイビッドは、繊細な顔つきのハンサムな男の子でありました。しかしながら時折彼の眼には曖昧さで翳り、相手を回避するような、反撥するような目付きが覗われました。それはまるで執念深い負け犬といった感じでありました。彼はどうやら兄弟との関係はよく、彼らとの間に競争心は覗われません。しかしどちらかという彼らに対して過保護になりがちな感じがありました。学校で親友はおりません。彼の父親は、彼がどうも一時的に「いじめっ子」との間に関係を結び、それも彼らを懐柔せんとする意図があるのではないかと、それで彼には同性愛的傾向があるのではないかと明らかに恐れている

ふうでありました。デイビッドの分析の始まりにおいて、しばらくは学校でのことそして成績などを話すことが多く、それは明らかに私との間により関係性を築くことに躍起になっているといった感じであり、いかなる解釈であれ、彼は大丈夫うまくやってゆくに違いないといった慰めとして捉えがちでありました。ところが実際のところその通りうまくいかないわけで、彼はますます不安を募らせてゆくわけでした。これは私に転移された不安感に関係付けされております。すなわち抑うつ的で、病気がちな母親であります。心がここにあらずといった空虚な感じで、そして情緒的な反応も、身体的な反応はともかくとして、期待できないといったふうな…。そうしたことに彼が自ら責任を感じていることについて解釈されました。そして私との協調性においてもそれが心からのものであるかどうか、そして分析を受けるだけの値打ちが自分にあるのかどうかについても内心抱いている深刻な不確かさが解釈されていったわけですが、それらはただ彼の中では混沌としたままで、こっそり逃げ腰といった傾きが覗われました。その心の深いところでは私が彼の考えに対してさらに侵入してくるの恐怖が潜んでおりました。不安感は、力溢れる、全てをお見通しの、報復的な‘ペニスの良心 penis-conscience’といったものに絡んでますます嵩じてゆきました。それは彼自身の敵意を投影しており、彼にとってもはや尋常に勝負できる相手ではないといったふうを感じているわけです。なぜならそれは、懐柔することも騙すことも出来ないしろものだからということになります。そこで彼は、話すことも遊具を使って遊ぶことも殆ど出来なくなってゆきます。それから絵を描くようになっていったわけです。いくらか痛々しげで、いかにも窮屈そうではありましたが、どうにか努力しているといった感じでした。しかしながらその恐怖にも関わらず、私とのコミュニケーションにおいては真正の努力が覗われました。この時期彼は母親に、治療は容易ではないけど、でも価値はあると語っております。

最初の絵は、われわれが治療のこの時期に取り組んでいたテーマを例証しているものでした。それはグレーハウンドレース※なのでした。〔※訳註；電気仕掛けで走るダミーのうさぎをグレーハウンドに追わせてスピードを競わせるギャンブル。〕 デイビッドは、最初そのページに幾つか線を描きます。それから誰も座ってない座席とそれからグレーハウンドが飛び出す箱状のゲートを描きました。彼はこれに交差させる横線を描き、そのうえに十字模様の半端なパターンを描いてゆきます。彼はそれからグレーハウンドを描き、その鼻面に濃くアウトラインを塗り、そして尻尾はその後ろにまっすぐに直立させておきます。彼はもう1匹その後ろにグレーハウンドを描くかどうか迷っておりました。二度ばかりゲートから出走するところを描きますが、それからゴチャゴチャに塗りつぶします。遂には頭と足四本だけが辛うじて残りました。彼はそれから左側の上に観戦する客席に「Mr. Jonesの指定席」とします。他の座席にも次々と誰某のための「指定席」と描いてゆきます。それからさらにはすべての座席はだんだん3本の波状の線でぞんざいに描かれて小さくなってゆきます。その他の座席は空席のままです。彼は途方に暮れている感じでした。彼はMr. Jonesが誰なのかを私に語りません。(しかしこれはマーガレット王女がMr. Armstrong-Jonesとの結婚を控えて間がない頃でありました。) 私が他の指定席について質問したのに対しての反応は、ただくわかんない…>といったものでした。やや心掻き乱して防衛的なふう…。そしてすばやく、犬の出走するゲートの描かれた形に色を塗ってゆきます、それはまるで私に批判されたように感じたふうで、自らの不品行を覆い隠すといったことのように覗われました。

この絵について私が解釈しましたことをここで詳しく述べることはいたしません。このセッションでも、また全般的にこの時期、デイビッドは解釈に対して直接的に反応することは不可能でした。分析は言うなれば彼にとっては‘審問されている’状況であり、そこで何かしらが露見し、それで罰されるといったことを恐れていたわけであります。従って本能的衝動は広範囲にわたって否認されねばならなかったわけであります。この絵で、一匹だけ描かれた無表情のグレーハウンドには頑丈な口輪が嵌められており、目がありません。それに肛門期的衝動が、そのいかにも糞便っぽいといえる尻尾に表徴されているといえます。観客席がずらっと列になって並んでいるのは、いかにも道徳的な優越を誇示するところの虚ろな脅しでもあるかのように彼を見下していました。それは恰も空虚なオツパイでしかない、非人間的な超自我、即ちペニスも赤ちゃんも悉く母親のからだから抹殺されたかのような、そうした感じを暗示するものといえましょう。これこそがデイビッドの内的状況であります。それがセッションの中で私に投影されたということになります。それで私の解釈は、威嚇的な父親・Jones氏・数学の教師による無慈悲なあらゆる捜しとして経験されたというわけです。そうした彼らの敵意からひたすら身を隠し、そして自らを防御しなくてはならないわけなのであります。ゲートを色塗したのは、‘償い reparation’の試みであったかと思われまます。赤ちゃんが生まれるところの母親のからだ、それもぐちゃぐちゃに切り裂かれたそれを元通りにしていのちを吹き込んだといったところでしょう。しかし洞察を得ることからの逃走、罪悪感の回避に基づくところの結果として、そうした試みは不首尾に終わったということのようです。

だが明らかに、彼の或る部分においては分析的作業において協調的であることができたといえましよう。なぜなら彼はセッションに毎回通ってきており、家庭内で私についてそれなりに評価することばを語っているわけですから。それを私には直接言えないとしても・・。

このセッションで表出されたテーマは、その後何ヶ月もの間治療において焦点づけられてまいります。彼は相変わらず口数は少なく、解釈にもほとんど直接的な反応はいたしません。しかし彼の絵はその後進展を見せてまいります。多様な拡がりを見せ、語られている内容もその表情も力強くかつ豊かになっていったのです。繰り返し描かれた家々、船、パブ、城、田舎家などにはしばしば何もない窓だけがあるのみでした。やがてそこに装飾が加えられてゆきます。それも細かく丁寧に描かれるようになってまいりました。時々それらの建物は色の付いたレンガで建てられたり、もしくは板張りで几帳面に覆われていたりといった具合で、釘もその細かいところまで克明に描かれております。私は、まずこの‘償い’の持つ万能感的性質について解釈してゆきました。つまりは何が何でも自分一人で為し遂げなくてはならないといったことであります。またそれに、こころの深いところでは彼は、私—実際に外界に在る人として—と共に協調しワークしてゆくことができないといったこと、それから私から彼が学んでいるものを一切認めることができないといったことで些か問題が生じているのを了解しているのに、その事実を頑として否認していることをも解釈してゆきました。そして彼の絵には人々が現れ始めます。だが、その後の数ヶ月の間、女性の姿は一向に現れませんでした。或る日、彼は丘の風景を描いておりました。そこに図体の大きな男の子が一人背中にパックを背負い現れました。彼の眼にはいかにも意地悪そうな、

こそこそ盗み見でもするような目つきでした（それは否認というよりもむしろ、この当時の彼自身のひどく厭な、人に不快感を与えるような目つきそのものだったのです）。この男の子はそれでっかい靴で絵の手前にあった丘の上をドスンと踏みつけます。私がそれについて、彼はオッパイを踏んづけているということ、そのオッパイとは即ちこの治療において彼に滋養を与えんとする‘心 mind’ということなのであり、それを敢えていのちのない無機物的対象、つまり丘の一部ということにして、実際に生きている母親/分析家とは一切関係ないものにしてはいるわけですが、彼はそうしたオッパイを踏み付けにしていることがここに表象されていると解釈しますと、デイビッドは成る程と感銘を覚えたふうなのであります。これ以降に、彼の絵のなかに女性たちが折々に登場してまいります。

「島」の絵は、その一年後に描かれました。クリスマス休暇の1ヵ月前頃からデイビッドは話しをすることが増えてきましたし、解釈に対しても直接的な反応をすることが増えてまいりました。彼のクリスマス休暇は私のよりも2週間余計に予定されておりました。海外に出掛けたのであり、事実彼はとても楽しんだもようです。彼がセッションに戻ってきたとき、それをちらりとほのめかしただけで、私のなかに好奇心やら羨望を惹起せんとするかのような意図が覗われました。そしてこのようにして彼がもらえなかった2週間の分析に関連づけられるいかなる情動も経験されず、避けたということになります。彼は私にこの週の最後のセッションで、火曜日に（彼の翌週の最初のセッションの日）15分ほど遅れてセッションをスタートしてもらえないかと尋ねます。学校からの帰り、ここへの途中の路で『ウインピー』※に立ち寄りたからだと言います。〔※訳註；「Wimpy」、イギリスのハンバーガー・ショップ。〕私はそれを認めませんでした。火曜日に彼は15分遅れて到着しました。（おそらく彼は、『ウインピー』に寄り道してきたのだらうと思われます。）おそらくハンバーガーを食べ終えてきたのでしょう。それでどこかこそこそしたふうに見えたのですが、ここで勢いよく絵を描いてゆきます。

それは「島」なんだそうです。それぞれの両端には文明化された地域があり、真ん中には砂漠やら岩だらけの山があって、隔てられているとのことでした。文明化された地域は徐々に広がってゆこうとしていると、彼は言います。しかしどちらの側の人も極めて独立心が強く、なかなか互いに影響を及ぼし合うことはないとのこと。山には野蛮な部族が住んでいて、頭狩り族とか人喰い族とかで、文明というものを知らず、ただお互いに戦闘を繰り返しているんだそうです。時折彼らは砂漠へと探索トレールに沿って出掛けてゆき、食糧を探すことをしたり、そしてオアシスでキャンプして過ごすことがあるとのこと。それから彼らの山へと引き返すんだとか。時折イギリスの文明地域から人々がこの砂漠へと出掛け、野蛮人たちの決して知りようのない貴重な鉱物を求めて山に分け入ろうとするそうです。しかしイギリスの文明地域の人々は砂漠でいかなる野蛮人とも会ったことはなく、そこでロシアの文明地域からの誰とも会うことはないとのこと。この時点で私は彼の描いた地図について解釈を試みます。それはいかにも彼自身と私との状況そのままが描かれたものということになります。（彼は左側に陣取り、私は右側に陣取っているというわけです）。2つの文明化された自己が出会うことの困難というのは、これら野蛮な情動がその狭間にあって、砂漠が介在しており、つまり休暇とか週末があり、だからセッションは無いわけですから、そこで彼はオアシスを求めてあちこちろつきまわっているということになるのであ

ります。そのオアシスとは、私との間の良きおっぱいをもらえるといった drinking 関係性という意味でありまして、そしてそこでは私もまたあちこちうろつき回っていて、しかし彼を探せず、それで途方に暮れているといったことになりましょう。敵対している部族というのは、絵の中では私側になっております。それは恰も彼は私を恐れているともいえましょう。それは、私が頭狩り族の共食いし合うといった‘性交中の両親’を表しているからであります。そしてまた、もしわれわれがお互いに出会うとしたら、それは当然そうした性交を持つことになりかねないといったことを恐れているということでもありましょう。しかしながら、これらの部族に出会い、彼らの貴重な鉱物を物にしたいと思っているのは、彼の‘文明化された部分’とも言えなくはないでしょう。

ここで彼は、4つの川を描き足してゆきます。それらは山の源流から流れ出て、2つの文明化された地域へと流れ、それから2つの別の沿岸にも流れていきます。彼は、文明化された地域は工業化のためにこの水が必要なのだと言います。私は、そうした‘野蛮な性交 savage intercourse’から、いのちがまた湧き出るといったことを解釈してゆきます。つまり、われわれの出会いから、これらの4つの川即ち4つのセッションというわけですが、彼の文明化を梃子入れするために必要な‘理解すること understanding’が溢れ出てくるといったこととして…。もしこの地図全体が彼自身を表徴しており、彼自身の異なる部分においてどんなことが起きているのかを私に示さんとする試みとして見做すならば、彼は、セッションとは幾らか或る領域を文明化することであるとしても、他の領域については断じてそうではないということ、そしてそれら2つの文明化された部分にしても互いに没交渉であって互いを知ることとはあり得ないと思っているといったことのようにあります。彼はそれから鉄道を描いてゆきます。「イギリス文明地域」「ロシア文明地域」と彼は後に命名し、そのように書き入れたのでした。それら2つの間に4つの駅、それに鉄道沿いに草原を描いてゆきます。これを再び私は、彼の相異なる別々の部分の連結を促し援助するところの4つのセッション、すなわち‘文明化された性交 civilized intercourse’をしている‘彼のなかの両親’として解釈いたします。彼は、野蛮人たちの住む部落に最も近い東側の河口付近に小屋と泥で作られた建物を付け加えて描きます。彼は、<或る種こも文明地域と言えるんだけど。でも正しくはそうとも言えないんだ。なぜならそれは魚を捕るとか狩りをするとかを主とした生活で、モノを造るといったことはないからね>と語ります。

私は、これを彼自身の‘食欲な部分’として解釈します。すなわち彼は、私を‘マミーのからだ’としてその心の中へ深く潜り込み、それが包含するところの食べ物、赤ちゃん、ペニスを一網打尽に捕えんとするわけで、それらを奪い、そしてそこに一切何ら戻すことはしないつもりなのです。これこそ‘人喰いデイビッド’であるわけです。彼は「ハンバーガー・分析・オツパイ」を私から奪い、それをこっそり食べ尽くし、そのようにして本来われわれのものであるはずの時間から15分間を全部自分一人のものにして盗み取り、そしてセッションにおいて彼と一緒に‘良き授乳関係 a feeding relationship’を愉しむことの満足を私から取り上げてしまったというわけなのであります。

この一方で、デイビッドは「野蛮人の小屋」を描き終わります。彼らはロシア文明地域に近いところ

にいるのですけれど、それとは一切関係しないのだそうです。なぜならば野蛮人は見知らぬ他人が敵対してくるのを恐がっていて、彼らを締め出すために周りに壁を設けているのだと語ります。徐々に「ロシア文明地域」と「イギリス文明地域」は沿岸に沿って繋がってゆきます。彼らはさらに島の内側へと拡がってゆくでしょうし、それで人喰い族やら頭狩り族やらにも影響を及ぼしてゆくものと考えられます。島の大部分が彼らの手になったとき、たぶん彼らは砂漠を灌水し樹木を植えることで開墾してゆくということのようです。私は、彼と私とが一緒に互いに理解し合い、それらを発展させるといった共通の目的を持つことにおいて出会えるとすれば、彼はそのところの内側に貪欲で野蛮人的衝動を抱え持ち、かつそれらを修正してゆくことが出来なくなかろうといった希望を持てることになることと示唆します。これは言うなれば、諍いが絶えず、互いを食い尽くし、そして彼のところと私のそれとの間のコミュニケーションを妨げるところの‘両親’としての私をその心の内に有していると感じる代わりに、彼が私を友好的な‘両親’、つまり一緒に赤ちゃんを作れる、そして彼にモノを作れるよう学ぶことを励ます、そうした‘両親’として内に摂り込んでいることが意味されておきましょう。これら内なる‘友好的な両親’とともにあって、砂漠—休暇やら週末—はさほど不毛にならずに済むといった希望がここに覗かれるのであります。

デイビッドはこのセッションを終えたとき、いかにも興奮しかつ高揚して面持ちでした。この数日後、偶然にも私は彼の母親から、彼がセッションから帰宅してMrs. ハリスは彼のことをとても喜んでくれたということ語ったということを目にしました。さらにはこれからも分析からもっともつと得るものがありそうだと語っていたようであります。

ここで一つ、これとその前の絵とセッションに比べての著しい相違といえますことは、彼が私の解釈に対して反応し、それに寄り添うかたちで考えることが出来たということとあります。野蛮な人喰い部族は、最初私に投影されていたわけですが、今や己自身の部分として認知されてもおり、しかも何らかの価値の備わっているものとして感じられているわけです。貪欲でかつ悪辣な‘肛門愛的汚染’といった攻撃にしても、もしもそれらがもっと明瞭にコミュニケートされ、もっと彼自身の文明化されかつ創造的な部分との接触に繋がってゆく場合には、もはや取り返しの付かない深傷になるとは感じられていないようであります。なぜならそれらは文明化された地域をいっそうのこと発展させるうえで必要な鉱物を包含しているというわけとありますから。野蛮人たちは、幽霊みたくで盲目で、しかも形も判然としていない犬に比べれば、ずっと人間らしい体裁をしているといえましょう。それに彼らは、犬に比べれば、ずっと彼の文明化された部分によってより好意的に扱われているともいえましょう。因みに、犬の場合ですと、まるつきり空っぽの墓石みたいな座席やらMr. Jonesの君座する指定席に睥睨されていたわけですから…。そうしたことから波及されていた彼の破壊衝動並びに超自我は、分析家への投影によってより人間的なものに humanized されてまいります。そして解釈された結果として、やがて迫害的な色彩が薄められて再びそれらは彼に摂り込まれたといえるのであります。最初の絵の中の空漠としていた座席は、次の2つ目の絵では‘砂漠’になっております。そこにはオアシスもあるわけです。そして文明地域の人そして野蛮人いずれもが訪れることができるというわけです。その砂漠も徐々にいずれは開拓されてゆくといった期待がなくもなさそうです。

最初の絵では、ほとんど衝動については完全に否認されていたといえましょう。デイビッドは、空虚で迫害的な超自我の睨みの下に自我及び本能が押し潰されるといった、彼のいのちの疲弊した姿を描いたともいえましょう。2回目の絵の最初の段階では、彼の無意識の中の‘悪辣な人喰い族の両親’が、彼のパーソナリティーを貪り食い、そして分裂させてしまい、彼を彼自身からも、そして彼の外界の対象との接触からも断ち切ってしまうのを描写していたものと思われます。これらは、口唇期愛的及び肛門期愛的衝動の投影並びに反転 reversal から生み出されたものであり、それがために引いては彼がオツパイやら両親の性交をも汚染させるなり、また空っぽなものにしたということがいえましよう。これらは、分裂 splitting であり、また投影でもあります。しかしそこには尚いのち life があり、中身 contents も充分あるものといえます。この描画の次の段階では、解釈の結果ということになりますが、彼は、外界の対象との接触を通して、己の意識と無意識との間の繋がりを築くことが出来ております。投影がどんどん減少しており、‘人喰い的な部分’を己自身のものとして認め、そしてこの部分が、そのコンティンするところの衝迫を伴いながら、価値づけられてゆくことも可能だといった期待がそこに覗かれてまいります。すなわち、肛門期愛的衝動は絵画において、それから口唇期愛的な衝動は言葉を使うことにおいて、有益に表出されていったというわけであります。

この2つ目の絵の発展が示唆するものは、「統合 integration」へ向けての成長かと考えられます。こうした分析において覗かれた進歩は、彼の学校での成績が著しく着実に上向きになってきて、友人らとも、ゲームなどで独創性を発揮したり、そしてもはや懐柔的になる必要のない、いっそう永続的な友情を築くことができるようになってきたといった外的現実も伴われておりました。

(訳出; 2016/01/25)

※ 原典; The therapeutic process

in the psychoanalytical treatment of the child (1968)

by Martha Harris

Collected Papers of Martha Harris and Esther Bick.

ed. M. H. Williams. pp.3-17. Perthshire: Culnie Press. (1987)
